

・仮名で書くほうが美しい

ひどい 酷い  
おののく 戦く  
すさまじい 凄まじい  
ものすごい 物凄い

右のような言葉は、仮名で書くほうがわかりやすく、**美しいと私は思う**。まあ、その好みは人それぞれでいいわけだが、好みにかかわらずワープロのせいで全部漢字にしてしまうというのなら、少し考えてみる必要があるだろう。

・文章とは

文章とは、読んだ人にこう言わせたいのだ。

わかった。なるほどな。そうしてやろう。

ラブレターというものを思い出してみればわかりやすい。ラブレターの目的は、私はあなたがこんなに好きだ、ということ伝えるだけではない。それだけなら、ストーカーの手紙でも似たようなことが伝わる。

ラブレターの目的は、相手が感激して、むこうもこっちを好きになってくれることであろう。そのことを私は、文章で人を動かす、と言っているのだ。

そして、ラブレターをワープロで打ちやいけませんよ、なのだ。まあ、ラブレターをワープロで打って出す人はそんなにはいないと思うが。

だとしたらそれと同じように、ぜひとも通したい企画書、無理を承知の上であえて頼む依頼書、非はこちらにあるのだがなにとぞここはお許し下さいという嘆願書、なども手書きにして当然ではないか、ということだ。

人を動かしたい文章は、手で書く。

**なぜなら、手書きの文章には、書いた人の心がこもっている、ような気がする、からだ。**

・あったことを羅列するだけの文章というのは読みにくく、内容がわかりづらい

どんな話であろうとも、ただ出来事を羅列する書き方しかできないというのはわかるであろう。ただあったことを羅列するだけの文章というのは読みにくく、内容がわかりづらいものだ。その調子で、その日にあったことを書き並べていくだけなのか、うんざりだなあ、という気がする。

たとえばの話、その男の子にもし、「ところが」という接続詞があったならば、作文がいきなりドラマチックになるのである。

・接続詞が貧しいということは、その文章の論理展開が単純

まずは、なるべくいろんな接続詞を使うように、あえて努力してみよう。自分がいつも書いている文章に、「そして」と「しかし」しか接続詞が使われていない、なんてのは寂しいことである。接続詞は文章の論理構造を作るのだから、**接続詞が貧しいということは、その文章の論理展開が単純、ということになるのだ。**

・こういう読点は打ってはいけない

「浩吉は、疲れていた。」

これは、浩吉だけではなくて、その文を書いている人も疲れているんだろうなあ。

つまり、「浩吉は」と書いたところで、次どう書こうかなあ、と考えているのだ。いろいろ迷ったりしている。そこでつい、「、」を打ってしまうのだろう。

**こういう読点は打ってはいけない。**

〈してして文〉

「たいくつだったのでゲームをして、それからテレビを見ていたらお父さんがきて、そろ

そろ出発だぞうと言ったのでしたくをして、車にのって出発して、一時間で着きました。」

### 〈自転車こぎ出し文体〉

私は司馬さんのその書き方を、〈自転車こぎ出し文体〉と勝手に名づけている。自転車をこぎ出す時、初めに二歩分ほど、足で地面を蹴って速度をつけ、そこで乗って安定スピードで走る、というのに似ていると思うのだ。安定スピードに乗る前の、小さな蹴りのような短い文が、話に入っていくやすくしているわけだ。

### 〈私は彼は文〉

「私は彼はおそらく無実だと思う。」というのが、まさに〈私は彼は文〉である。それで、こういう文章は意味がわかりづらいのだ。

#### ・軽口をまぜる

漫才のツッコミは、「おうおう偉そうに」とか、「そこまでは言うてないがな」とか、「よしなさいって」、「むちゃくちゃ言うなよ」などと、相手の気取りや脱線や悪ノリをとがめ、相手を引き戻す、あるいは引きおろすものだ。

それと同じように、女性たちは真面目な文章の中にふいに軽口をまぜることにより自分と読み手をクールな観察者の視点に引きおろすのだ。

くだけた文章の中の、ツッコミ用語には種類がたくさんある。

「そこまで言うかよ。」

「下心見え見えじゃん。」

「私はそんなことを言ってるんじゃない。」

「悪かったわね、おばさんで。」

「なんとというか、まさに××としか言えないタイプですよ。」

「キレましたね、私そこで完全に。」

「笑っちゃいました。」

「なんで私の責任になるわけ。」

「これはソートーに精神衛生に悪いですよ、ホント。」

右のような言い方を、女性エッセイストたちは真面目な論考の文章の中に絶妙にまぜてくるのだ。

### 〈しゃべくり文〉の親しみやすさ

「そこでおれは、さり気なく金をその婆さんに渡してその場を去った。かなり格好よかったと思う（ほんとかよ）。でも、おれの行動に気がついた者は一人もいなかったのだ（いっつもそうだ）。」

これなどは、〈しゃべくり文〉が堅い本文へのツッコミになっているというのが、よくわかる例だろう。

#### ・「まず伝わってこそ文章」

第一に紹介するのは、「まず伝わってこそ文章」という題名のものだ。「文藝春秋 特別版」二〇〇二年九月臨時増刊号に発表した。

次のようなものである。

文章を書く時にいつも気になっているのは、次の二つのことのバランスをどうとるかである。その二つとはこうだ。

①言いたいこと、伝えたいことが曇りなく読み手に伝わるかどうか。

②この文章を書いている私が利口そうに見えるかどうか。

この二つはかなり方向性が違うことなので、こうして二つ並べてみると奇妙な感じがするかもしれない。意味が正確に伝わるといえるのは、文章に求められる実際的な利点である。それに対して②のほうは、他人の評価を気にした技巧的なことであり、それをあんまり気にかけているのもみみっちいような気がする。

しかし、正直に告白してもらえば、ほとんどの人は文章を書く時にこの二つのことを気にしているはずである。

つまり人は、文章を書く時に無意識のうちにかもしれないが、よくわかるなあ、と言われたいと願っており、同時に、うまいなあ、と言われたい望みも持っているのだ。

ところが、普通に考えると、この二つの願望が二つ同時にかなうというのは非常にむずかしいことなのだ。つまり、わかりやすく書きすぎるとあまり利口そうには見えず、利口そうに書きすぎると、名文なんだろうな、とは思うものの、よくわからない文章になることが多い。

だから普通は、この二つのことは対立する概念だと思われている。平易な文章は素人っぽく、難解な文章は芸術的だ、なんて。

谷崎潤一郎の有名な『文章読本』でも、冒頭近くにこの二つのことに触れている。谷崎はいきなりこんなことを言うのだ。

「私は、文章に実用的と芸術的との比別はないと思います。文章の要は何かといえ、自分の心の中にあること、自分のいいたいと思うことを、出来るだけその過りに、且(かつ)明瞭に伝えることにあるのでありまして、手紙を書くにも小説を書くにも、別段それ以外の書きようはありません。(中略) そうしてみれば、最も実用的なものが、最もすぐれた文章であります。」

実用的な文章とは何か、芸術的な文章とは何か、ということが今ひとつピンとこないで、ここで谷崎の言っていることはわかりにくいと評判が悪い。しかしこれは結局のところ、伝わるように書くか、利口そうに書くかの二者択一に悩むことはない、と言っているわけである。

谷崎の『文章読本』は一般大衆に向けて、文章の指南書として書かれたものだから、彼はきっぱりと、伝わる文章でいいのです、と明言するのだ。利口そうに見られたいが故の技巧的でむずかしい文章のことは忘れなさい、と。

ただしもちろん、彼自身が小説を書く時には芸術的な文章を意識していなかったはずはない。実用的な文章が最もすぐれた文章である、なんていう考えで、あのきらびやかでよどみのない美しい文章が書けるわけがないのだから。谷崎は、素人ならば意味さえ伝わる文章ならそれで十分です、と言っているだけである。

ただ、谷崎の文章というのはどんなに難解なことを書いても、複雑な心理を書いても、文章上にはまったく濁りがなく意味がつるとよくわかるという奇跡のようなものである。あんなによくわかって、なおかつ美しいのだから脱帽するしかないのだ。

人は文章を書く時、つつい利口そうに書きたくなる。それは当然のことで、それがうまくできたら名文になるのだが、失敗すると目もあてられない悪文になるというおそろしい一面がある。学者などが知識をひけらかし、奇をてらい、しばしば言葉足らずに自分にしかわからない難解な文章を書くのがその例である。

私は、若き日に谷崎の文章の曇りのないわかりやすさに感嘆した人間なので、どちらかと言えば、文章を、わかりやすく誰にでも伝わるように書きたいと考える一派だと思う。人に言いたいことが伝わってこそその文章であって、気取りは二の次だろう、と思うのだ。

そう思うがあまり、時として説明がくどくなることがあって、自戒している。

しかし、そういう、伝わる文章を書きたいと願う私にだって、うまいなあ、と思われたいという憧れはある。文章を書くからには、そのスケベ心と無縁でいられるものではないのだ。

結局、最初にあげた二つのことの、バランスをどうとるかである。

私は、この頃、こう思っている。

まずは、徹頭徹尾わかる文章を書こうと心がけることなんだろうな、と。とにかく、わかること、伝わることをめざすのだ。

人に何かを伝えるためには、現象を数多く知っていなければならない。その現象の原因がわかっていなければならない。そして、どう説明すればすつとわかってもらえるかの技巧も持っていなければならない。

まずは、そういう修業をして、曇りなくわかる文章というものを目標にすることだろうと思う。

それが仮に自在にできるようになった時に、もうひとつの憧れの要素、利口に見えもよくわかる文章なので、達人の技巧の冴えすら感じられてしまう、という形で。

そのうまさは、初めから技をしかけて、ひねりにひねって書く利口ぶりとは別のものであって、よくある失敗であるところの、ひとりよがりのただ難解な悪文になるこ

とが少ないのではないだろうか。

利口そうに見えるように、という願望はひとまず忘れよう、ということだ。それよりも、誰にでもちゃんとわかること、伝わることをめざして書く。そうして思い通りに文章が書けるようになったら、自然にうまさも手に入っているのでは、と思うのである。

#### ・前記の文章の吟味過程

この文章の中での、用語の吟味を二つばかり振り返ってみよう。

私が文章を書く時に気になっている二つのことが冒頭に書いてあるが、そのうちの②の、「書いている私が利口そうに見えるかどうか。」という言い方は、実はとても戦略的なものである。これは普通なら、「大人っぽい知的な名文が書けているか。」でもよさそうなものである。

なのに私はわざと、「利口そうに見えるか」という俗っぽい、みみっちい言い方をしている。ここには、誰だって本音はこういうことでしょう、という正体暴露の気分がこめられているのだ。そして同時に、そういうのは結局格好づけなのであり、文章にとっては二の次のことなんです、という主張が早くもにじませている。

にじませてはあがるが、少しユーモアのある言い方なので、つい笑って読んでしまうようになっている。

そして論が進んで、私はこう書いている。

「伝わる文章を書きたいと願う私にだって、うまいなあ、と思われたいという憧れはある。文章を書くからには、そのスケベ心と無縁でいられるものではないのだ。」

右の文の中の、スケベ心、という言葉は、いちばん伝わるのはどの言葉だ、という吟味によって選ばれているのだ。ここはごく普通に、「その憧れと無縁でいられるものではないのだ。」でも文章的には少しも変ではない。むしろそのほうが普通だろう。

しかし、スケベ心という俗な言葉が使われていることにより、苦笑のうちに微妙なことが伝わるのだ。

欲だな、色気のことだな、それをスケベ心と言っちゃうか、まあそういうことだろう、と受け止められるだろうという計算があるのだ。

・・・

要するに、曇りなく意味が伝わる文章を書くのは、決して素人っぽくもなく、初歩的なことでもなく、大いに吟味と工夫をしなければならぬ高度な技であると、私は考えているのである。

#### ・読むと感銘を受ける名文

伝わる文章、わかりやすい文章のことはそれでよいでしょう。しかしもう一方に、文章には美しさがある。読むと感銘を受ける名文もあり、書いた人を尊敬してしまうことがまれではない。その文章から筆者の知性と品格が伝わってきて、すがすがしい読後感を待ちたりすることもある。

そういう名文の持っているよさは、どうすれば身につけられるのだろうか。

・・・

品格のある文章を書く人というのは、人間性に品格があるのだと思う。知性があり、人柄に嫌味なところがなく、利口ぶろうとするところもなく、純粹に感動できるという人が、素直に文章を書くところには品格がにじみ出るのだ。

紙に書きつけた文字からそんなすごいものがにじみ出るというのが、文章の面白さであるが、その品格は文章テクニクでは生み出せない。それをめざすなら、人間性を高めるしかないのである。

だから、文章を書く上での心がけとしては、ちゃんと伝わるように留意する、ということしかないのだ。わかりやすく曇りなく伝えたいと思い、その努力を重ねていけば、それだけで見事な文章になるのだと思います。

#### ・〈用語の詛り〉に気をつける

二十一世紀になってもまだ、「彼女はパンタロンをはいていた。」と書きちゃって、お年寄りだなあ、と思われるのは損なのである。今はそれはパンツというのが無色の用語なのだ。パンツと書いてあるから下着のことかな、と思う人はもうそういない。

同じような理由で、ある会社の商品名を一般名称のように使うのもなるべく避けよう。NHK じゃないんだから、厳密になりすぎることはなくて、テトラポッドとか車のポリッシュなどにまで神経を尖らせることはない。しかし、宅急便はヤマト運輸の商標名だから、宅配便と言っておこうとか、サビオも、バンドエイドもやめて、そのことは傷テープと書いておこう、と心配するのが、〈用語の訛り〉に気をつけるということである。

#### ・謝罪文を書くコツ

そこで、謝罪文を書くコツだが、それは、すべての事情を長々と書く、である文書の良さで、深くおわびしたい気持である、ということ伝えるのだ。**A4判の紙一枚の謝罪文なんてとんでもない。**少なくとも三枚にはならなきゃいけない。

#### ・随筆

さてそこで、多少なりとも文章を書くことに興味のある人にとって、随筆は書いてみたいものではないだろうか。小説はストーリーを思いつかなきゃいけないので書けないが、随筆なら書けそうな気がするのでは。そして、随筆を書くのはちょっと知的でいいよな、なんて思うのでは。

知的なだけではない。**随筆を書くことには、自分の体験を書き、人に知らしめるという満足感がある。**その体験をして自分がどう思ったかという、考えを伝える喜びも。そしてそういう考えを持つ私とは、**そういう感性の人間なのだ、ということ伝える充実感**がある。

文章を書きたいというのは、多くの場合、自分を伝えたい、という欲望から生じているものだ。だとすれば随筆とは、比較的手軽に自分を表現できる文芸であり、ぜひ書いてみたいもののはずである。

#### ・随筆を書いてみる時の、コツと注意点

さてそこで、あなたが随筆を書いてみる時の、コツと注意点を見ていこう。

私は既に、**随筆の結局の目的は、自分の自慢をすること**だと分析してしまったのだが、さて今から書こうという時には、とりあえずそのことは忘れていよう。その意図が見え見えでは、好意的に読んでもらえないからである。

いかにも知識誇りという感じの文章、あからさまに自画自賛の文章というのは、とりあえずやめておくように注意しよう。著名な大先生の文章ならそれもやむを得ないだろうが、私やあなたのような、どこの馬の骨かよくわからん、という者は偉そうにしないほうが読んで気持ちいい随筆になるのだ。人にもものを教えることを職業にしている人（大学教授とか学校の先生とか）は、特にこのことを強く意識しましょう。

そして次のコツは、自分の体験にもとづいて書け、ということである。**私は先日こんな体験をして、そこからこんなことを考えた、という構造にしる、ということだ。**

そうではなく、このところ私はある問題についてしきりに考えていて、ようやく結論が見えてきた、という構造はやめたほうがよい。そういう随筆は読もうとした時、入口でつかえるのである。非常に読み進みにくいものになってしまう。

#### ・どんな風に自分を出すか

さてそういう随筆を書いていて、その究極の目的は自分をひとに知らしめたいわけである。私はこういう人間でして、というのをひとに伝えることに随筆の快感があるのだから。

しかし、どんな風に自分を出すか、というのがむずかしい。臆面もない自慢、と受け止められてはいけないのだから。そういう随筆は読んでもらえない。

さりげなくて、品がよくて、知性が漂っている、というふうに分を出せたら最高なのだが、そんなふうに分を書けるのは相当の名手である。

**どんなふうに分らしさを表現すればいいのだろうか。**

実は、その問いに答はない。なぜなら、そのやり方にこそ、その人らしさ、つまり個性が出るのだから。その人の個性によって、自己表現のしかたもいろいろであって、こう演じたほうがいい、というコツはないのだ。あなたとしては、いろんな随筆を読んで、この人の語り方が肌に合うなあ、というのを真似てみるのがいちばんの策であろう。

・悪い例を二つ

そこで私としては、こういう自己表現のしかたはやめたほうがいいですよ、という悪い例を二つばかりあげておこう。なぜやめたほうがいいかと言うと、読む人にうんざりされるからだ。

- ・「変り者の私は」的自己表現
- ・「私たちの世代はそうでなかった」的自己表現

随筆は、さりげない発言であり、そのさりげなさに味わいがある。